

## 琉球語宮古狩俣方言の音韻と文法

衣畑, 智秀 / 林, 由華

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

38

(開始ページ / Start Page)

17

(終了ページ / End Page)

49

(発行年 / Year)

2014-03-31

(URL)

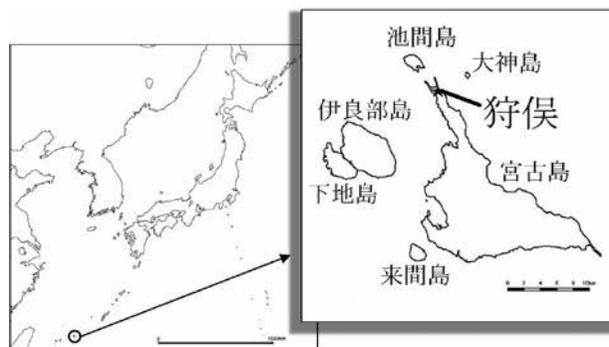
<https://doi.org/10.15002/00012495>

# 琉球語宮古狩俣方言の音韻と文法

衣 畑 智 秀  
林 由 華

## 1 狩俣方言の概要

狩俣方言は、沖縄県宮古島市の本島北部の狩俣集落で話される、琉球語宮古方言群に属する方言である。



平成24年の人口統計<sup>\*1</sup>によると、狩俣集落には657人が居住している。狩俣方言を日常的に使用するの、この中でも60歳代からの高齢者であるが、同統計によると、平良地区の65歳以上の人口は全体の約三割であり、そこから考え話者数は200人程度ではないかと思われる。また、話者の全ては日本語とのバイリンガルであり、若い世代には継承されていない危機言語である。

狩俣方言は、宮古諸方言の比較研究にはよく取り上げられる重要な方言であるが、この方言の音韻・文法を記述の中心にした研究は意外と少ない。平山他（1967）には、狩俣方言のアクセント、音韻、及び、動詞・形容詞の活用への言及があり、最後に指示詞の表を載せる。ただし、平山他（1967）では、近隣方言である大浦集落の方言を中心に記述し、狩俣方言については特徴的な点をのみ指摘するに留まっている。名嘉真（1992）には、平山他（1967）よりも遙かに詳しい音韻と動詞活用の記述がある。名嘉真（1992）の調査は、明治40年生まれの話者に対して行ったものであり、本稿の調査より古い世代の話者への調査となっている。名嘉真（1992）との相違点については本文中で触れるところがある。野原（1996a, 1996b）には狩俣方言の助詞の例文が豊富に載る。本稿では、文法の全体像を捉えるという目的のために助詞の用例を詳しくは挙げられなかったため、野原（1996a、

\*1 [http://www2.city.miyakojima.lg.jp/toukei\\_m\\_2013/](http://www2.city.miyakojima.lg.jp/toukei_m_2013/)

1996b)には本稿の不足を補うデータが提供されていると言える。大野他(1998)には、狩俣方言の語彙を120、フレーズを6挙げる。大神方言の記述に付随して挙げたものである。

これらに対し本稿では、狩俣方言の音韻・文法の全体像を提示することを目的としている。近年、宮古島市北部の方言群については、Shimoji(2008)(伊良部島長浜方言)やPellard(2010)(大神島方言)など音韻・文法の全体像を記述する研究が出されているが、狩俣、島尻、大浦など本島北部の集落については詳しい記述を見ない。前述の研究では、個別の研究者が狩俣方言の一部を記述しており、それぞれに話者や話者の生年が異なるため、個別の研究結果が一つの方言をなしているかは明確ではない。そこで本稿では、インフォーマントを絞り、音韻・文法の全体像を記述することを目的とする。本稿の元となるデータは、2010年12月から2012年11月までの間に、池間平治氏(昭和1年生)、仲宗根正治氏(昭和24年生)に協力頂き得られたものである。本稿では、上記の目的の為、主に前者から得られたデータによって構成し、そのデータを後者によって確認した\*2。また、これまでの研究では狩俣方言の談話が載せられることもなかったため、本稿の最後には、本方言の理解に資するよう短い談話を付した。

## 2 音韻

本節では、狩俣方言の音韻体系について説明する。他の宮古諸方言と同様、狩俣方言にも摩擦雑音を伴う特殊な母音が存在する。この音は、中舌母音や舌先母音と呼ばれるほか、その子音的性質から成節的子音と解釈されることもある。この音の解釈によって宮古の各方言の音韻体系は大きく左右されるが、未だ定説はない(かりまた(1986)、加治工(1989)、沢木(2000)などを参照)。本論文ではこれを部分的に子音と共通した特徴をもった母音とし、暫定的な音韻体系を示す。

### 2.1 母音

狩俣方言には、表1に挙げる母音がある。

表1 母音

	前		後
狭	i	l	u
			o
広		a	

\*2 主に池間平治氏(昭和1年生)のデータによって本稿を構成した理由は、世代差によるものである。世代差によって異なる部分は多くあるが、代表的な違いとしては、後で述べる中舌音/l/が歯茎摩擦音の後を除き、/i/と中和してしまっているということがある。このため、これまでの研究成果との突合せを行うには、ある程度高齢の話者のデータによる必要があると思われる。

母音には基本的に長短の区別があるが、auを由来としているoのみは長音しか持たない。頭子音が無声音の場合、広母音でもしばしば無声化する。/ɺ/は、やや前よりの中舌狭母音 [j]～非円唇後舌狭母音[w]の音色に加え歯茎の摩擦噪音をもつ摩擦母音 (fricative vowel) であり、研究者によって中舌母音や舌尖 (尖) 母音と呼ばれるが、ここでは摩擦中舌母音とする\*3。さらにここでは、/ɺ/は、単独で、もしくは頭子音を伴って、音節の中核となるという典型的な母音の機能のほか、限られた環境において頭子音としても機能する音素とみなす\*4。

頭子音をもたない場合、[z̥i]～[w]などで実現する (例「鳥」[tu̯z̥i～tu̯w])。この母音が頭子音としてとりうるのは/p, b, k, g, c, dz, s, m/である。頭子音がある場合はたいてい摩擦噪音を伴っているが、特に語末では摩擦噪音がほとんど聞こえないこともある (例「足」[pag̥i～pagu])。無声音が頭子音となった場合は、その摩擦噪音が[s]となるほか、他の母音と同様しばしば母音自体が無声化する (例「昨日」[ks̥i̯nu～ks̥inu])。また、音節の中核としての/ɺ/に直接母音が後続することはなく、形態音韻論上でそのような連続が生じた場合は、後続母音の頭子音として自身 (/ɺ/) がコピーされる\*5。摩擦噪音のあるなしは自由変異であることを考慮すると、/ɺ/が音節の中核となる場合は大まかに以下のように音価が決まる (以下、母音音価はiで統一)。

$$\begin{array}{l} \text{ɺ} \longrightarrow \text{̥i} \sim \text{̥i} \quad /C[-voiced] \_ \\ \longrightarrow \text{i} \quad /elsewhere \end{array}$$

## 2.2 子音

狩俣方言には、表2に挙げる子音がある。

\*3 摩擦母音については、Ladefoged and Maddieson (1996)などを参照。また、宮古諸方言におけるこれに対応する音の音声的特徴についての様々な見解については、かりまた (1986)を参照。本文中にも言及したように、近年、一部の方言については、それが中舌母音の音色をもち (大野他2000、青井2010) かつs, zに近い位置での調音もなされており (青井2010)、中舌母音と舌尖母音両方の性質を持っていることが、機器分析・実験により確認されている (大野他 (2000) には狩俣方言の分析も含まれている)。

\*4 ɺは通常母音としてのみ用いられる記号だが、このように分析する理由については、2.4.1節を参照のこと。

\*5 これは他の成節子音と同じ規則であり、詳細は2.3、2.4で説明する

表2 子音

	唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
破裂音	p b	t d		k g	
破擦音			c dz		
			[ts~tʃ] [tʃ~z]		
摩擦音		f	s[s~ʃ]		h
鼻音	m	n			
弾音		r[r]			
接近音	w	v[v~ʋ]		y[j]	

/h/は、歴史的に、語頭でaka>haaとなつてできたもので、固有語ではこのパターンでしか現れない（例「赤」haa<aka）。/w/もaのみと結合し、「豚」waaなどごく限られた語彙でのみみられる。/v, m, n/はそれぞれ長子音として独立した語を形成できる（例「芋」[m:]）。また、/v/は単独で頭子音になることはなく、頭子音の場合は必ず重子音となる（例「おまえ」/vva/）。

### 2.3 音素配列

ここでは、日本の方言学で主に用いられる記述方法を援用して、拍音（1モーラ長の分節音のまとまり）を単位として語内の音素配列の規則を書く。音素配列の単位となる拍音にはいくつかの種類が認められる\*6。

- 母音を中心とする拍音：(C)(G)V
- 子音から成る拍音（成拍子音）：R（/m, n, v/の共鳴子音）、Q（いわゆる促音）

\*6 言語の記述において音素配列は音節を単位として示されることが多いが、現段階では音素配列も含め狩俣方言において「音節」をどのように定義すべきか議論できないため、ここでは取り入れている。一方で、狩俣方言は日本語東京方言などと同様、いわゆるモーラを単位としたリズムをもっており、意識的にゆっくり発音する場合には、発話はこのモーラの単位に区切られる。ただし、「母音（聞こえ度のより高い音）を中心とした音のまとまり」を音節とすれば、開音節（CV）と閉音節（CVC）の両方が認められるといえる（ただし、語末に立つことのできるCは限られている）。それに加えて、母音に依存せず成立する成節子音音節（CC）も存在する（例「芋」/mm/）。また、特記すべきこととして、語頭の子音連続があり、かつそれが子音単独で重さ（長さ）をもつことがあげられる。例えば、「知らない」/ssan/は母音を中心とした音の集まりという点では一つのまとまりを成しているが、モーラを数えると、s-sa-nと3モーラの長さをもっている。「音節」はしばしば「母音（聞こえ度の高い音）を中心とした音のまとまり」の単位であり、同時に音素配列やリズム・音調上の音韻的単位でもあるとされるが、両者は必ずしも一致しているわけではない。狩俣方言をはじめ宮古諸方言全般においては、1モーラ長を持てる音が音韻レベルで聞こえ度の高い音を含んでいないことも多い。もっとも極端な例としては、大神方言におけるsやfの無声摩擦音のみで成り立つ語がある（cf. Pellard 2010、ペラルール・林2012）。

R (resonants) はいわゆる成拍鼻音の撥音にv(唇歯接近音)を加えたものである\*7。Qは、いわゆる促音を表し、Cの前に付いて重子音を形成する。つまり、これは語末に立つことはなく、語末に立つことのできる子音はRの/m, n, v/のみである。ただし、日本語と異なり、RもQも語頭に立つことができる。また、CとVの間には、G (glide) /y/が入ることができ、いわゆる拗音をつくる\*8。これらの語内における配列の規則をまとめると以下のようになる。

- それのみで独立した語を形成できるのは (C)(G)VとRであり、Qは必ずCの前につくという点で、他の拍音に依存した拍音である。またこの性質上、Qは語末にはたかない。
- Rは3つ以上並ばない。Qについては、Cの直前にのみ立つという性質上、2つ以上並ぶことはない。
- Rに直接Vが後接することではなく、RC(G)Vとなる。

以下に語例を示す (はモーラ境界を示す)。一語は2モーラ以上の長さをもつため、例は2モーラ語を中心としている。

CV.V	赤	/ha.a/
CGV.V	おじいさん	/syu.u/
Q.CV	来る	/f.fu/
R.CV	土	/n.ta/
CV.R	蛇	/pa.v/
R.R	芋	/m.m/
V.Q.CV	牛は	/u.s.sa/
V.R.CV	母	/a.n.na/

また、 $\uparrow$ は、Vのスロットをうめるほか、 $V_1.CV_2$ という連続において $V_1$ が $\uparrow$ の場合に、Cを埋める子音として機能することができる。これは主に、 $\uparrow$ 終わりの語が主題形、対格形となった時に現れる(表3参照)\*9。このCを埋める頭子音となった場合、先行する $\uparrow$ が無声音に続いている場合には[s](例「月は」/c]k]i]a/[ts]i]ks:a])、それ以外の環境では[z]で実現さ

\*7 ただし、日本語と異なり、成拍鼻音のm, nは音韻的に区別される。

\*8 撥音、促音という概念に触れているが、これを音素としているわけではなく、あくまで音素配列の単位として用いている。また、ほかにも特殊拍として母音長音がたてられることもあるが、現時点では長母音と母音連続の区別について議論していないため、ここでは用いていない。

\*9 これは、主題標識および対格標識がそれぞれ歴史的に\*ja, \*juに由来すると考えられ、さらに $\uparrow$ が後続するjを同化する音変化があったためである(そのほか、 $\uparrow$ はr, wなども同化している。詳細はかりまた(2007)などを参照)。

れる (例「父」/ɸa/[z̥iɰa])<sup>\*10</sup>。

## 2.4 形態音韻規則

### 2.4.1 重子音化

主に名詞形態論上でみられるもので、主題標識 $a$ や対格標識 $u$ が接続する際に、語末の子音が重複されその接続要素の頭子音となる現象をさす。次の表3の主題形、対格形は、簡易音声表記を用いて示している。また、子音終わり以外の語の主題形、対格形については、3.1を参照のこと。

表3 子音おわりの名詞の主題形および対格形

語末の音		主題形 (～は)	対格形 (～を)
子音 (短子音)	海/im/	imma	immu
	犬/in/	inna	innu
	蛇/pav/	pavva	pavvu
	豆腐/toofu/	to:ffa	to:ffu
	芋/mm/	m:ma	m:mu
摩擦母音	牛/usɿ/	ussa	ussu
	妻/tudzɿ/	tuttsa	tuttsu
	道/ncɿ/	nttsa	nttsu
	-pɿ <sup>*11</sup>	-	-
	紙/kabɿ/	kabzza	kabzzu
	月/tsɿkɿ/	tsɿkssa	tsɿkssu
	脚/pagɿ/	pagzza	pagzzu
	米/maɿ/	mazza	mazzu

表3にあるように、主題および対格標識が接続する際に語末の子音が重複しているが、摩擦中舌母音ɿ終わりの語でも同様のことがおこる。これはこの母音の音韻面での子音的性質を示すものである<sup>\*12</sup>。摩擦音および破擦音に続く場合の摩擦中舌母音の連続は、以下のように実現される。(ɿはモーラ境界を表す)

\*10 ただし、2.5節でも述べるように、3節以降は、音価がわかりやすいよう、頭子音として[s]になる場合にはs、[z]になる場合にはzと表記することとする。

\*11 pɿ終わりの単語については未調査。

\*12 このため、これを音節の中核となれる「子音」に分類することも可能であるが (Shimoji 2008, Shimoji2011)、当方言においてはその音節形成における機能などから母音に分類している。

- (1) s<sub>1</sub>lV → s.sV  
 c<sub>1</sub>lV → c.cV  
 dz<sub>1</sub>lV → c.cV\*<sup>13</sup>

## 2.4.2 無声化およびg脱落

無声子音で終わる語に、助詞などが後続する場合、語頭の有声音が無声化し、音素交替が起こる。動詞の接辞や複合語間など、様々な要素間で起こる。次の表4では、「～から」「～と」のついた形は、簡易音声表記に語境界を表す=を用いて示している。

表4 子音の無声化

	「～から」=gara	「～と」=du
傘/sana/	sana=ara	sana=du
酒/saki/	saki=gara	saki=du
犬/in/	in=gara	in=du
蛇/pav/	pav=gara	pav=du
牛/us <sub>1</sub> /	us=kara	us=tu
妻/tudz <sub>1</sub> /	tudz=gara	tudz=du
道/nc <sub>1</sub> /	nc=kara	nc=tu
月/c <sub>1</sub> k <sub>1</sub> /	c <sub>1</sub> ks=kara	c <sub>1</sub> ks=tu
脚/pag <sub>1</sub> /	pagz=gara	pagz=du
米/ma <sub>1</sub> /	maz=gara	maz=du
豆腐/toofu/	to:f=kara	to:f=tu

表4の *gara*、*du* はそれぞれ他方言では *kara*、*tu* で現れており、歴史的には母音間での有聲化が起っていると考えられるが、他方言で初頭が有声音である *gami* (「～まで」) などでもこの無声化が起り、また *taasi* (「～まで」) など、有声音に後続しても初頭が有聲にならない助詞などもあることから、共時的には無声化と捉えられる\*<sup>14</sup>。

\*13 d.dzVとまらないのは、dz (有聲歯茎破擦音) は二重子音になれないなどの制約があるためであると考えられる。

\*14 本論文では2.1節で述べたように<sub>1</sub>を音韻的に無声化する母音と捉えているため、語末に<sub>1</sub>があっても後続する助詞に無声化が起こる。この無声化は、名嘉真(1992)、大野他(1998)などでも観察されているような、摩擦中舌母音の後に鼻音の無声化が起こる現象と同じものであると考えられる(例「いつ=も」/ic<sub>1</sub>=mai/[its=ɱai])。無声鼻音は狩俣方言に存在しないため、この場合は形態音素交替とはならない。また、他の有声音の無声化と同様、直前の無声子音が有声音を伴って発声された場合は無声化はおこらない。ただし、この鼻音の無声化は形態素境界以外の語内でも観察されるが(例「爪」/c<sub>1</sub>mi/[tsɱi])、その他の有声音についてもそれがいえるかどうかはまだ分っていない。

また、表4の語末aの語にあるように、aに挟まれたgが脱落するという規則がある。

## 2.5 表記について

表記には基本的に音素としてあげた記号を用いて音韻表記する。ただし、摩擦中舌母音 /ɺ/ については、実際の音価をわかりやすくするために、それが頭子音のスロットに立った場合には、対応する子音で表記する。この際、有声歯茎摩擦音は独立した子音音素としてはあげていないが、zをその表記として用いることとする。

- (2) a. 「月を」 /cɺkɺ=ɺu/ : cɺkɺ=su  
 b. 「脚を」 /pagɺ=ɺu/ : pagɺ=zu  
 c. 「米を」 /maɺ=ɺu/ : maɺ=zu

## 3 文法記述

本節では、狩俣方言の形態統語的特徴を見ていく。本方言も、日本語や他の琉球語諸方言と同じく、典型的な主要部後置型言語である。すなわち、基本語順はSOVであり、修飾語のあとに被修飾語が置かれ、前置詞ではなく後置詞を持つ。以下、文の基本要素となる名詞、形容詞、動詞の特徴を、それぞれに膠着する接辞・助詞類とともに見ていく。その後で、文を項として取るモーダルや接続の助詞について記述する。

### 3.1 名詞

名詞は、格標識をとり動詞の項になることができる。また、名詞を修飾する場合には属格の *nu* もしくは *ga* を取る。ここでは、本方言における名詞の閉じた語類 (3.1.1) 及び接辞類 (3.1.2) を見た後、名詞の取る格標識について、本方言の特徴的な点を述べる (3.1.3)。また、名詞は主題や焦点を標示することが多いため、これらを表す助詞についても見る (3.1.4)。最後に、名詞が述語になる場合について簡単に触れる (3.1.5)。

#### 3.1.1 名詞の下位類

名詞には、指示性が強く述語にはならない語類が存在する。これらは、専ら項や付加語となり閉じた体系をなすため、ここでそのリストを挙げておく。

名詞の下位類で閉じた体系をなすものとしては、指示詞、人称詞、疑問詞が挙げられる。宮古諸方言では、指示詞は通常三系列が報告されるのに対し、本方言では *u*-系列、*ka*-系列の二系列しか用いられない (平山他1967、内間1984)<sup>\*15</sup>。

\*15 ただし狩俣集落の東に浮かぶ大神島方言では、狩俣同様二系列の指示詞が用いられる (Pellard 2010)。

	<i>u</i> -系列	<i>ka</i> -系列
もの・人	<i>uri</i>	<i>kari</i>
場所	<i>uma</i>	<i>kama</i>
連体形	<i>unu</i>	<i>kanu</i>

*u*-系列は話し手の近辺（近称）、*ka*-系列は話し手から離れた場所（遠称）について用いられる<sup>\*16</sup>。

(3) (財布が50m離れた購買にあったのかを聞かれて)

kama=n=du      ara-daari      uma=nu    ncɿ=n=du    uti      u=taɿ.  
 あそこ=Dat=Foc   Cop-Neg.Conj   そこ=Gen   道=Dat=Foc   落ちる   Stat=Past  
 あそこではなく、その道（3mほど離れた場所）に落ちてたよ。

人称詞は、1人称、2人称に以下のような形式が用いられる。

	単数	複数
1人称	<i>ba/ban/banu</i>	<i>baagaa</i>
2人称	<i>vva</i>	<i>udu</i> <sup>*17</sup>

1人称単数は、後ろに付く助詞によって、次のような形で現れる。

主題	主格	対格	与格	方向格	添加
<i>ba=a</i>	<i>ba=a</i>	<i>banu=u</i> <sup>*18</sup>	<i>ba=n</i>	<i>ba=ai</i>	<i>ban=mai</i>

主題、主格、与格、方向格は*ba*に、添加は*ban*に、対格は*banu*に付いていると分析できるため、上の表のように三つの異形態を考えておく。なお、方向格の*ai*については3.1.3を参照。3人称には遠称の指示詞が用いられ、人称に特化した形式はない。

\*16 以下、グロスの略号は論文末の「グロス略号一覧」を参照されたい。また、=は語と助詞の境界を、-は語と接辞の境界を表す。助詞も接辞も直前の語と同じアクセント単位を成すが、前者は内部に句を含むことができるのに対し後者はできない。それぞれ服部（1950）の附属語と拘束形式に大凡該当する。

\*17 敬称として*undzyoo*が用いられる。

\*18 ただし、対格に主題の*ba*が付くときは*banuuba*とはならず*banooba*となる。

最後に、疑問詞の一覧を挙げる。

いつ	<i>icɔ</i>	なに	<i>noo</i>	なぜ	<i>noosɪnci</i>
どこ	<i>ndza</i>	どれ	<i>ndzi</i>	どのように	<i>nooci</i>
だれ	<i>taru</i>	いくつ	<i>ifucɔ</i>	どんな	<i>noocinu</i>

### 3.1.2 名詞接辞

名詞には特定の名詞接辞が付き、さらに名詞を形成する。本方言の名詞接辞には、複数を表すものに *-nummi*、*-doo*、*-gyaa* などがあり、複数、曖昧、分割（「ずつ」）など多様な意味を表す *-naa*（辺り）がある。また、いわゆる指小辞の *-gaa* も認められる。この他、数詞に付く分類詞としては、広く使われる *-cɔ*（-つ）の他に、*-taɔ*（-人）、*-garaa*（-匹）、*-ka*（-日）、*-kiu*（-軒）などがある。

### 3.1.3 格

名詞は、主に格を表す助詞を伴って名詞句として機能する。名詞句は、動詞によって選択される項となったり、動詞を修飾する付加語となる。名詞句が動詞によって選択される項となる場合、その名詞句を標示している助詞あるいは接辞の分布によって、各方言もしくは言語は、対格型言語や能格型言語などの類型に分類される（Comrie 1981など）。

本方言は、日本語及び多くの琉球語諸方言と同じく対格型言語である。すなわち、(4-a) のような他動詞の動作主を標示する形態 *nu* が、意志的であれ非意志的であれ、(4-b) (4-c) のように、自動詞の唯一の項を標示するからである。

- (4) a. *yarabi=nu=du cɔkui=yu tataki uɔ.*  
 子供=*Nom=Foc* 机=*Acc* 叩く *Stat*  
 子供が机を叩く。
- b. *yarabi=nu=du buduɔ.*  
 子供=*Nom=Foc* 踊る  
 子供が踊る。
- c. *kinciku=nu uti uɔ.*  
 財布=*Nom* 落ちる *Stat*  
 財布が落ちている。

また、このように主格を表す *nu* は、他の多くの琉球語諸方言と同様に属格標示にも用いられる。次にいくつかの例を挙げる。

- (5) isya=**nu** yaa (医者の家)、kupin=**nu** futa (ビンの蓋)、yaani=**nu** toosɿ (来年の刈り入れ)、duu=**nu** basɿkan tukuru (自分の悪いところ)

一方、琉球諸方言では、このような主格・属格標示に *nu* 以外に *ga* が使われるが (内間 (1994) など参照)、当方言では代名詞の後に限られるようである。

- (6) ba=**a** munu (私のもの)、kari=**ga** sɿmucɿ (あの人の本)、uri=**ga** ntabɿ munu (これのおもちゃ)

対格は *u* によって表される。対格 *u* は、前接する語の語末音節によって形態音韻論的な変異を持っている。次の図は、対格標識 *u* が直前の語末音節によって、どのような形態音韻論的規則がかかるかを樹形図で表したものである。枝が分かれるところには直前の語がどのような音節で終わるかを示し、それぞれの場合の形態音韻論的規則を枝分かれのあとに記している。Cは子音、Vは母音、.はここではモーラ境界を表す。

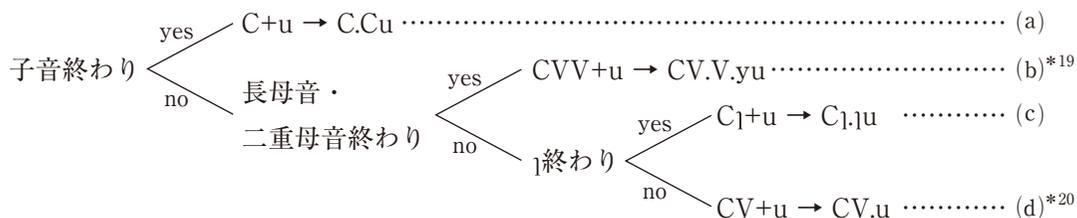


図1 対格標識の形態音韻論的規則

\*19 ただし、ɿの長音と思われる一音節語mɿɿ (身) やsɿɿ (巢) に *u* が付いたときには、ɿ終わりの語と同様に[mɿɿɿzɿ][sɿɿɿsɿ]のように実現する。ただしこれらは、[mɿzɿ][sɿsɿ]のように短く二拍で発音されることもあるようである。その時はɿ終わりの語として問題ないが、なぜ対格や主題が付くと短くなるかが問題となる。

\*20 例外的に *fu* 終わりの場合は、子音終わりと同じになる (toofu (豆腐) + *u* → tooffu)。このため、宮古の他の方言において *f* を成節的だとする研究もある (かりまた2005など)。狩俣方言でも体系全体からその妥当性を考慮する必要があるが、現時点では名詞形態論におけるこの現象は例外扱いとしておく。

次にそれぞれの場合の具体例を挙げる。

- |                        |                                    |
|------------------------|------------------------------------|
| (a) 子音終わり              | (b) 長母音・二重母音終わり                    |
| in (犬) +u → i.n.nu     | kii (木) +u → ki.i.yu               |
| im (海) +u → i.m.mu     | dzɪɪ (字) +u → dzɪ.ɪ.yu             |
| kuv (昆布) +u → ku.v.vu  | mai (前) +u → mai.i.yu              |
| (c) ɲ終わり               | (d) 短母音終わり                         |
| cɪkɪ (月) +u → cɪ.kɪ.ɪu | sana (傘) +u → sa.na.u (→ sa.no.o)  |
| usɪ (牛) +u → u.sɪ.ɪu   | saki (酒) +u → sa.ki.u (→ sa.kyu.u) |
| maɪ (皿) +u → ma.ɪ.ɪu   | taku (タコ) +u → ta.ku.u             |

なお、例文や談話資料のグロスでは、以上の最終モーラを対格標識として注記している。

以上のような形態音韻論的交替は、宮古諸方言にはよく見られる現象である。本方言の特異な点としては、相手や方向を表す *ngai* にも、一見形態音韻論的交替と見られるものがあることである。まず、*ngai* は、次のように子音、及び a 以外の母音の後では *ngai* の形で現れる。

- (7) a. utudu=nu=du utudu=**ngai** yooɪ=zɪ=du fiɪ=daɪ.  
 弟=*Nom=Foc* 妹=*All* お祝い=*Acc=Foc* あげる=*Past*  
 弟が妹にお祝いをあげた。
- b. dusɪ=**ngai** tigabɪ=zɪ mutasɪ=taɪ.  
 友達=*All* 手紙=*Acc* 渡す=*Past*  
 友達に手紙を渡した。

しかし、母音 a の後では、*ngai* は次のように ai となって現れる。

- (8) a. siwa asi uɪ baa=n=na ba=**ai** dangaa asir-u.  
 心配 する *Stat* 時=*Dat=Top* *ISg=All* 相談 する-*Imp*  
 困ったことがあったら、私に相談しろ。
- b. sakyu=uba uma=**ai** mucɪ kisi=siti bun=nuba kama=**ai** muc-i.  
 酒=*Acc.Top* ここ=*All* 持つ 来る=*Conj* お盆=*Acc.Top* あっち=*All* 持つ-*Imp*  
 酒をこっちに持ってきて、お盆をあっちに持って行け。

もし、ai という形を *ngai* から導こうとすると、a の後で ng が脱落することになるが、そのような音韻規則を考えることは難しい。音韻規則として考えられるのは、2 節で述べたよ

うなaに挟まれたgが脱落する規則であり (sana+gara → sana=ara)、よってここでは、何らかの理由でnが脱落した後、音韻規則によってgが脱落したものと考えられる。

以上、格に関して、本方言の類型的特徴、及び形態音韻論的現象について見た。ここで述べたものも含め、本方言の代表的な格標識の一覧を、日本語の対応する格標識とともに挙げる。

=nu, =ga	「が」(主格/属格)	=gara	「で・から」(奪格)
=u	「を」(対格)	=si	「で」(具格)
=n	「に」(与格)	=du	「と」(結果格)
=ngai	「へ」(方向格)	=sui	「と」(共格1)
=ngi	「で・へ」(場所格)	=saari	「とともに」(共格2)
=taasi	「まで」(限界格1)	=ncjki	「より」(比較)
=gami	「まで」(限界格2)		

与格のnは、動作の相手や存在の場所を表す他に受身の動作主も表す。

- (9) anna=**n**=du      iq-zari.  
 母親=*Dat*=*Foc*    怒る-*Pass*  
 母親に怒られた。

ngiは、(10-a)のように動作の場所を表す用法を持っているため「場所格」と名付けたが、(10-b)のようにngaiと同様に移動先を表す用法もある。

- (10) a. bummyaa=**ngi**=du    budu<sub>1</sub>=zu    narai    u<sub>1</sub>.  
 集会所=*Loc*=*Foc*    踊り=*Acc*    習う    *Stat*  
 集会所で踊りを習っている。
- b. irau=**ngi**      asuu=ga      ika=ra.  
 伊良部=*Loc*    遊び=*Purp*    行く. *Vol*=*SF*  
 伊良部島に遊びに行こう。

garaは、出発点や起点を表す他に、移動の手段を表す。(11)の最初のgaraは出発点の用法、次のgaraは移動の手段。

- (11) uk<sub>1</sub>naa=**gara** myaaku=ngai=ya funi=**gara**=du ffu=ta<sub>1</sub>.  
 沖繩=Abl 宮古=All=Top 船=Abl=Foc 来る=Past  
 沖繩から宮古へは船で来た。

なお、*taasi*と*gami*の違い、*sui*と*saari*の違いについては、詳しいことは分かっていない。

### 3.1.4 主題／焦点など

格標識以外の助詞として、主題 (*Top*) を表す *a* (「は」、対格には *uba*)、焦点 (*Foc*) を表す *du* (「こそ」、添加を表す *mai* (「も」、限定を表す *dyaan* (「だけ」、類推を表す *dzɿn* (「さえ」) などといった形式が挙げられる。焦点を表す *du* は、疑問文の焦点を示すのにも用いられる。それぞれの例を示しておく。

- (12) a. ani midum faa=**ya** pudo=**o** upui-gan.  
 年長 女 子供=Top 体=Top 大きい-AA  
 長女は背が高い。
- b. in=nu=**du** munu=u fai u<sub>1</sub>.  
 犬=Nom=Foc もの=Acc 食べる Stat  
 犬がものを食べている。
- c. ndza=ngi=**du** asubi ifu=ta<sub>1</sub>?  
 どこ=Loc=Foc 遊ぶ 行く=Past  
 どこへ遊びに行った?
- d. vva=**mai** fuc<sub>1</sub> byaan=naa.  
 2Sg=も 口 早い=SF  
 あなたも食べるのが早いね。
- e. kagyu=u uc<sub>1</sub>ki ufu tukuru=uba baa=**dyaan**=du ssi u<sub>1</sub>.  
 鍵=Acc 置く Prep ところ=Acc.Top 私=だけ=Foc 知る Stat  
 鍵が置いてあるところは、私だけが知っている。
- f. dzin=nu nyaa-daari=du ɿzu=u putu-gaara=**dzɿn** ka-ari-ddan.  
 お金=Nom ない-Neg.Conj=Foc 魚=Acc 一-CL=さえ 買う-Pot-Neg.Past  
 お金がないので魚一匹さえ買えなかった。

主題を表す *a* は、対格の *u* と同じ形態音韻論的規則 (図 1) が働いている。結果の形のみ以下に示しておく。

- |  |   |
|--|---|
| (a) 子音終わり<br>in (犬) +a → i.n.na<br>im (海) +a → i.m.ma<br>kuv (昆布) +a → ku.v.va     | (b) 長母音・二重母音終わり<br>kii (木) +a → ki.i.ya<br>dzɪɪ (字) +a → dzɪ.ɪ.ya<br>mai (前) +a → mai.i.ya                      |
| (c) ɺ終わり<br>cɪkɪ (月) +a → cɪ.kɪ.ɺa<br>usɪ (牛) +a → u.sɪ.ɺa<br>maɪ (皿) +a → ma.ɺ.ɺa | (d) 短母音終わり<br>sana (傘) +a → sa.na.a<br>saki (酒) +a → sa.ki.a (→ sa.kya.a)<br>taku (タコ) +a → ta.ku.a (→ ta.ko.o) |

### 3.1.5 名詞述語

名詞はそのままの形で述語としても用いられる。

- (13) kanu puto=o sinsii.  
 あの 人=Top 先生  
 あの人は先生だ。

名詞述語は、動詞 *aj*などを伴って否定や過去などの意味を表すが、これについては、動詞の活用について述べた後に3.3.4で述べる。

## 3.2 形容詞

形容詞は、主語・目的語などの動詞の項にならず、語彙的なアスペクトとして状態性を持つ。形態的特徴としては、接辞 *gan*や *fu*などを伴う、重複して用いることができる、などがある<sup>\*21</sup>。ここでは、形容詞が名詞を修飾する場合(3.2.1)、動詞を修飾する場合(3.2.2)、述部となる場合(3.2.3)に分けて、その際の形態的特徴を記述していく。

### 3.2.1 名詞修飾

名詞修飾において、最もよく使われる手段は、形容詞の語幹をそのまま名詞と複合させるものである。(14-a)では *aparagi*が、(14-b)では *naga*が形容詞の語幹に当たる。

\*21 ここで言う形容詞は、Shimoji (2008) のProperty Concept Stemsに当たる。Shimoji (2008) は、形容詞という用語をこの中の重複形に限定して用いている。

- (14) a. ukaasʃ **aparagi** putu=nu=du aasʃki uʃ=naa.  
 大変 美しい 人=*Nom=Foc* 歩く *Stat=SF*  
 すごくきれいな人が歩いているね。
- b. mmipii **naga** munu=u mucu kuu.  
 もっと 長い もの=*Acc* 持つ 来る.*Imp*  
 もっと長いのを持って来い。

このほかに、語幹ほどはよく使われないが、接辞 *gan* を付けた (15-a) や、語幹を重複させ属格の *nu* を用いる (15-b) のような形が、名詞修飾に使われることがある。

- (15) a. pudu=nu **upui-gan** puto=o yagida=ai=du yuu baʃ.  
 体=*Gen* 大きい-*AA* 人=*Top* 柱=*All=Foc* よく ぶつかる  
 体の大きい人は、(頭を) よく柱にぶつける。
- b. **takaa taka=nu** putu=nu=du aasʃki uʃ=naa.  
 高い=*Gen* 人=*Nom=Foc* 歩く *Stat=SF*  
 背の高い人が歩いているね。

### 3.2.2 動詞修飾

動詞修飾は主に二つの手段によって表される。一つは形容詞語幹の重複形を使うもの、もう一つは接辞 *gari* を使うものである。

- (16) a. **nagaa naga** nbasʃ.  
 長い 伸ばす  
 長く伸ばす。
- b. gadza=nu=du ngyamasʃ-**kari** tubi maari uʃ.  
 蚊=*Nom=Foc* うるさい-*AA* 飛ぶ 回る *Stat*  
 蚊がうるさく飛び回っている。

ただし、動詞が「する」や「なる」の場合は、接辞 *fu* が用いられる。

- (17) sansʃ=n nari ur-iba, tida=a maru-**fu** nari uʃ.  
 秋=*Dat* なる *Stat-Csl* 日=*Top* 短い-*AA* なる *Stat*  
 秋になったので、日は短くなった。

### 3.2.3 述部

述部において最も一般的に見られるのは、語幹に接辞 *gan* を付けた形と名詞を修飾した形である。それぞれの例を (18-a)、(18-b) に挙げる。

(18) a. gadza=nu=du ngyamasɿ-kan.

蚊=*Nom=Foc* うるさい-AA

蚊がうるさい。

b. kanu yaa=ya bɿda yaa.

あの 家=*Top* 低い 家

あの家は屋根が低い。

形容詞を述語に用いる場合に、形式名詞 *munu* を用いることが周辺方言では行われるが（西原方言、林（2009）参照）、本方言では（18-b）のように普通名詞を用いる方が一般的である。

以上以外の方法では、使用される頻度は低いが、次のように重複形が用いられり、また、ごく稀に語幹のみで述語となることがある。述語で重複形になる語と語幹で用いられる語がどういう関係にあるのかは、まだ調査が及んでいない。

(19) a. kanu yaa=ya bɿdaa bɿda.

あの 家=*Top* 低い

あの家は屋根が低い。

b. paɿ=nu=du kasamasɿ.

蠅=*Nom=Foc* うるさい

蠅がうるさい。

### 3.2.4 形容詞まとめ

以上、構文的環境からそこで使われる形容詞の形態を見てきたが、これをまとめると表5のようになる。表5では、上で見た *gan*、*fu*、*gari* を、接辞を用いる方法としてひとまとめにしている。これらは全て、副詞化接辞 *\*ku* から変化したもの (*\*ku* からの音変化、もしくは *\*ku* への存在動詞 *\*ari* の膠着) と見なせるからである（名嘉真1992）。

表5 形容詞の形態と用法

	名詞修飾	動詞修飾	～なる	述部
重複形	○	○	×	△
接辞	○	○	○	○
語幹	○	×	×	△
(語幹+名詞)	NA	NA	NA	○

表5では、「語幹+名詞」は、(18-b)のような、述部になる場合のみを対象としている。これを除いて他の形態法を見ると、本方言では、語幹に接辞を膠着させる方法がもっとも一般的であり、重複形や語幹は、名詞や動詞を修飾する場合に、その機能を一部担っているということが分かる。

### 3.3 動詞

動詞も、形容詞と同じく主語・目的語などの動詞の項にならない。また、瞬間の動作や変化を表せ、語彙的アスペクトとして、基本的に状態性を持たない。動詞の形態的特徴は、以下で見るさまざまな接辞を下接できる点にある。動詞と接辞との接続関係は、動詞の活用として記述される。以下では、動詞の活用を記述した後(3.3.1)、そこで出る動詞語形の問題について述べ(3.3.2)、さらに、動詞が他の動詞や形容詞とともに現れる補助動詞・補助形容詞構文について見る(3.3.3)。そして、最後に、動詞の活用によって表される意味が、名詞や形容詞でどのように表されるかを見る(3.3.4)。

#### 3.3.1 動詞活用

ここでは、屋名池(2005)をもとに狩俣方言の動詞活用を記述する。屋名池(2005)によると、動詞は語幹末が子音か(子音語幹動詞)母音か(母音語幹動詞)の違いによって、二種類しかない(鈴木(1996)も参照)。また、接辞も同様に、母音始まりか子音始まりかの二種がある。この見方では、活用とは、語幹と接辞を結びつける際に、母音連続もしくは子音連続を避けるための形態論的な操作と見なすことができる<sup>\*22</sup>。語幹末と接辞の始まりに母音や子音の連続がなければ、活用特別な操作は生じない。

この考えをもとに、本方言の活用は図2のような枝分かれで示すことができる。～C、～Vはそれぞれ子音終わりの語幹、母音終わりの語幹を表し、C～、V～はそれぞれ子音始

\*22 ここで述べる母音連続、子音連続の回避は、動詞が接辞をとって動詞語形を作る語形成のレベルにのみ見られる制約である。たとえば、「mai(前)」や「ffa(暗い)」は、既に語彙的に決まっているので、この語形成レベルの制約に抵触しない。その点で、2.4節で見た重子音化や無声化のような、方言全般に適用される音声レベルの規則とは異なっている。

まりの接辞、母音始まりの接辞を表している。φは音形の無い接辞であり、語が子音で終わる方が母音で終わるよりも有標であるため、子音語幹動詞にφが付く場合は、子音連続と同じく特別な操作が必要になる。

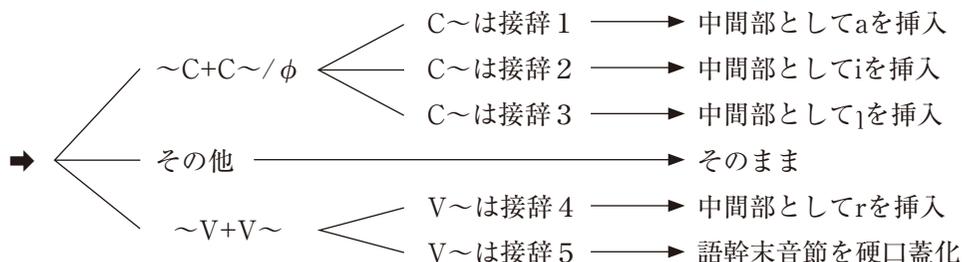


図2 狩俣方言における活用

母音連続・子音連続が生じない中央の線を除くと、図2には五つの枝分かれが認められる。この五つの枝分かれは、大凡学校文法における活用形の数に対応する。よってこの枝分かれは、学校文法のような活用表を得るための、計算の過程を示したものであると見ることができる。ただし、特殊さを含む部分にだけ操作を示している点で、活用の一覧表とは異なっている。

図2からは、三種類の母音挿入と二種類の子音の操作が認められ、複雑な活用に見えるが、実際に生産的な操作は、接辞1と接辞4、そして接辞3であり、その他はごく少数の特殊な操作を覚えておけばよい。接辞の一覧を表6に挙げる。表中‘/’で並記したものは、それぞれ子音語幹動詞、母音語幹動詞に付く異形態である。

ここでは、子音語幹動詞として *pus* (干す)、母音語幹動詞として *paidi* (出る) を取り上げて、語幹と接辞の膠着の仕方を見ていく。

まず、最も生産的な接辞1から見る。子音語幹動詞と接辞1が接する場合、境界に子音連続が生じる。よって、図2の~C+C~に入り、接辞1であるため境界に *a* が挿入される。結果、(20-a) のような形が得られる。他方、母音語幹動詞と接辞1の間に母音連続は生じないので、図2の中央の線を通り (20-b) の語形が得られる。以下、大凡対応する日本語訳を示していく。

表6 動詞接辞

	派生接辞		屈折接辞				
			副動詞		定動詞		
接辞1	<i>sɪmi</i> (使役)	<i>ma</i> (尊敬)	<i>daari</i> (否定連言)	<i>daaraa</i> (否定条件)	<i>n</i> (否定)	<i>di</i> (意志)	<i>dyaaran</i> (否定意志)
					<i>ddan</i> (否定過去)	<i>baa</i> (願望)	
接辞2			$\phi$ (連言)				
接辞3			<i>gacɪma</i> (同時)	<i>ga</i> (目的)			
			<i>daraa</i> (条件)	<i>digaa</i> (条件)			
接辞4	<i>ari</i> (可能)	<i>asi</i> (使役)	<i>iba</i> (理由)	<i>ibamai</i> (譲歩)	<i>ɪ</i> (基本)	<i>i/u</i> (命令)	
接辞5						<i>a/u</i> (意志)	

㉔ a. 派生：pus-a-sɪmi (干させる)、pus-a-ma<sup>\*23</sup> (干しなさる)

副動詞：pus-a-daari (干さずに)、pus-a-daaraa (干さなければ)

定動詞：pus-a-n (干さない)、pus-a-di (干そう)、pus-a-dyaaran (干すまい)、  
pus-a-ddan (干さなかった)、pus-a-baa (干したら)

b. 派生：paidi-sɪmi (出させる)、paidi-ma (出なさる)

副動詞：paidi-daari (出ずに)、paidi-daaraa (出なければ)

定動詞：paidi-n (出ない)、paidi-di (出よう)、paidi-dyaaran (出るまい)、  
paidi-ddan (出なかった)、paidi-baa (出たら)

なお、派生接辞は、動詞語幹に付き新たな動詞語幹を作る操作なので、定動詞接辞、副動詞接辞が付くまで図2の操作が繰り返される。その結果、たとえばpus-a-sɪmi-n (干させない) のような形が得られる。

ここで、接辞1と関連が深いと思われる接辞5について見る。今度は、子音語幹動詞に

\*23 尊敬を表す*ma*は、 $\phi$ 終わりの子音語幹動詞と同じ活用をする接辞である。 $\phi$ 終わりの子音語幹動詞については注\*28を参照。

子音連続が生じないので、中央の線を通り (21-a) が得られる。(21-a) の接辞 *a* は、形態的、意味的に接辞 1 に使われる挿入母音 *a* と関係が深いと思われるが、ここでは、活用を語幹と接辞の接続関係と捉えているため、接辞 1 の挿入母音とは別に考えている。他方、母音語幹動詞には母音連続が生じ、母音連続を避けるための口蓋化が起きる。結果、(21-b) が得られる。

- (21) a. 定動詞 : pus-a (干そう)  
 b. 定動詞 : paidy-u (出よう)

次に接辞 2 について見る。接辞 2 は、母音語幹動詞の語幹がそのまま用いられる特殊な形である。その場合は何も操作がいらぬが、子音語幹動詞の場合、子音で語が終わるので母音 *i* が挿入される。結果(22)を得る。

- (22) a. 副動詞 : pus-i (干して)  
 b. 副動詞 : paidi (出て)

次に接辞 3 が付くと、子音連続を生じる子音語幹動詞の場合にのみ *ɲ* が挿入される。

- (23) a. 副動詞 : pus-ɲ-gacɲna (干しながら)、pus-ɲ-ga (干しに)、pus-ɲ-digaa (干したら)、  
 pus-ɲ-daraa (干したら)  
 b. 副動詞 : paidi-gacɲna (出ながら)、paidi-ga (出に)、paidi-digaa (出たら)、  
 paidi-daraa (出たら)

最後に接辞 4 を見る。母音語幹動詞の場合のみ子音 *r* が挿入され、以下の形を得る。

- (24) a. 派生 : pus-ari (干される)、pus-asi (干させる)  
 副動詞 : pus-iba (干すので)、pus-ibamai (干しても)  
 定動詞 : pus-ɲ (干す)、pus-i (干せ)  
 b. 派生 : paidi-r-ari (出られる)  
 副動詞 : paidi-r-iba (出るので)、paidi-r-ibamai (出ても)  
 定動詞 : paidi-ɲ (出る)、paidi-r-u (出ろ)

なお、(24-b) で基本接辞 $ɿ$ <sup>\*24</sup>が付いた場合、paidi-r- $ɿ$ と $r$ の挿入が予測されるが、 $ɿ$ の前では $r$ が消えるという音韻規則 ( $r \rightarrow \phi / \_ɿ$ ) により、paidi- $ɿ$ という形が得られると考えられる。この音韻規則が仮定されるのは、本方言に $rɿ$ という音は現れず、比較言語学的に $rɿ$ が期待されるところには $ɿ$ が現れるからである<sup>\*25</sup>。

### 3.3.2 $ɿ$ と子音語幹動詞

前節では、挿入母音（接辞3）もしくは基本接辞（接辞4）に $ɿ$ があることを見た。しかし、 $ɿ$ は全ての子音語幹動詞に現れるわけではない。そこでここでは、子音語幹動詞の語末子音によって、pus $ɿ$ に対応する形がどのように現れるかを見ておく。表7にはまず、連言の形（学校文法の連用形）で語幹を示し<sup>\*26</sup>、次いで基本接辞 $ɿ$ が使われる連体用法、そして挿入母音 $ɿ$ が使われる-gac $ɿ$ naの形を挙げた。putu（人）及びgac $ɿ$ naの前は、語幹と接辞に分析せずに示す。

表7 語幹末子音と $ɿ$

語末子音	連言	～人	～しながら
k終わり	kak-i（書く）	kafu putu	kafu-kac $ɿ$ na
g終わり	kug-i（漕ぐ）	kuu putu	kuu-gac $ɿ$ na
s終わり	pus-i（干す）	pus $ɿ$ putu	pus $ɿ$ -kac $ɿ$ na
c終わり	tac-i（立つ）	tac $ɿ$ putu	tac $ɿ$ -kac $ɿ$ na
f終わり	cɿf-i（作る）	cɿfu putu	cɿfu-kac $ɿ$ na
v終わり	kav-vi（被る）	kav putu	kav-gac $ɿ$ na
b終わり	tub-i（飛ぶ）	tuu putu	tuu-gac $ɿ$ na
m終わり	num-i（飲む）	num putu	num-gac $ɿ$ na
r終わり	kar-i（刈る）	ka $ɿ$ putu	ka $ɿ$ -gac $ɿ$ na
$ɿ$ 終わり	a $ɿ$ -zi（言う）	a $ɿ$ putu	a $ɿ$ -gac $ɿ$ na
$\phi$ 終わり	ara-i（洗う）	aroo putu	aroo-gac $ɿ$ na

まず、動词语幹にそのまま $ɿ$ が付くものとしては、s, c終わりの語幹が挙げられる。次に、語幹に $ɿ$ が付き、音韻変化を起こしていると想定されるものとしては、m, r,  $ɿ$ 終わりの語幹

\*24 この接辞は、動詞単独で終止する場合の他、3.4節で見るようなテンス、モダリティ、接続、談話標識などを表す助詞を下接する汎用性の広い接辞であるため、「基本接辞」と呼ぶ。

\*25 およそ、日本語の*i*が現れる位置には、本方言を含む宮古諸方言で $ɿ$ が現れる。よって、*ri*に対応する音節は $rɿ$ が予測される。しかし、*tori*（鳥）に対応する形は本方言で $tuɿ$ である。これも、 $ɿ$ の前で $r$ が消えていると考えればよい。

\*26  $aɿ$ 及び $kav$ は、重子音化により $aɿ$ -zi,  $kav$ -viとなる。

が挙げられる<sup>\*27</sup>。先に述べたように、本方言ではrの後に<sub>l</sub>が現れることはない。また、本方言では、mの後には短母音の<sub>l</sub>が現れず、比較言語学的にm<sub>l</sub>が想定される場合にはmで現れる。よって、短母音の<sub>l</sub>について<sub>l</sub> → φ / m\_\_ という音韻規則を仮定し、<sub>l</sub>が付いていると想定できる。また、<sub>l</sub>終わりの語幹に<sub>l</sub>付いた場合、<sub>ll</sub>が融合し短母音<sub>l</sub>になると考えておく。

これに対し、表7のk, g, f, v, b, φ<sup>\*28</sup>終わりの語幹では<sub>l</sub>が付いていると仮定することはできない。まず、f, vは出現環境が限られた子音であり、主母音が<sub>l</sub>と想定することはできない。また、k, g, b, φに<sub>l</sub>が付けば、それぞれ、k<sub>l</sub>, g<sub>l</sub>, b<sub>l</sub>, <sub>l</sub>という表7と異なる形が予測される。これらの子音には<sub>l</sub>ではなくuが付いている考えられる。k, g, f, b終わりの語幹には、そのまま母音uが現れている<sup>\*29</sup>。また、v終わりの語幹では、vとuが融合しvとなり、φ終わりの語幹では、auが融合し長母音ooとなっていると考えられる<sup>\*30</sup>。

このように考えると、基本接辞<sub>l</sub>は、母音語幹動詞には<sub>l</sub>がそのまま付くが、子音語幹動詞に付く場合のみ<sub>l</sub>とuの異形態があることになる<sup>\*31</sup>。まとめると次のようになる。

動詞の種類	母音語幹動詞	子音語幹動詞	
語幹末子音		s, c, m, <sub>l</sub> 終わり	k, g, f, v, b, φ 終わり
基本接辞	<sub>l</sub>	u	

### 3.3.3 補助動詞・補助形容詞

本方言でも、日本語と同様、一つの節に二つ以上の動詞が現れることがある。その場合、前の動詞が名詞句に格を与え、後の動詞がアスペクトや授受などの述語の補助的な意味を

\*27 名嘉真 (1992) では、この他にn終わりのs<sub>ln</sub> (死ぬ) もs<sub>ln</sub> putu, s<sub>ln</sub> gac<sub>lna</sub>となるとしており、これが正しければ、n終わりの動詞もm終わりの動詞と同様に<sub>l</sub>が付いていると見なせる。しかし、我々の調査では、s<sub>ln</sub>はs<sub>lni</sub> putu, s<sub>lni</sub> gac<sub>lna</sub>と特殊な活用をしていたため、ここからは除いた。特殊活用全般についての記述は稿を改めたい。

\*28 ara-iやumu-iなどaやuで終わる語幹のものを母音語幹動詞ではなく子音語幹動詞としたのは、活用の仕方において、他の子音語幹動詞と同じ振る舞いをするためである。この理由は、歴史的に\*araw-iや\*umup-iのように子音語幹であったものが、子音w, pが脱落したためであると思われる。ただし、現在の本方言では、どの活用形にもこの想定される語末の子音wやpが現れることはない。

\*29 歴史的には、\*kaku>kafuや\*kugu>\*kuv>kuuのような変化が起きていると考えられるが、kafuやkuuという形を共時的な音韻規則から導くことは難しい。

\*30 表7のそれぞれの形は、動詞活用の面接調査において得られたデータを元にしたものである。活用の調査以外では、k, g, b, φ終わりの語幹に付いて、ik<sub>l</sub>/ifu, kug<sub>l</sub>/kuu, idya<sub>l</sub>/idyooなど、<sub>l</sub>が付いたと考えられる形も得られた。これらに両形があることは名嘉真 (1992) も参照。

\*31 <sub>l</sub>の付く形は、古代日本語の連用形に相当し、それが新しいものか古いものかの議論が分れる (内間1984、本永1994など)。狩俣 (1999) は、子音語幹動詞に付く<sub>l</sub>は母音語幹動詞に付く<sub>l</sub>からの類推でできたと考えているようだが、本稿では、この二つを同じ形態と見なしている。一方、uの付く形は古代日本語の終止形に対応するものである。

表すとき、後に来る動詞を補助動詞と呼ぶ。

本方言において、補助動詞となる動詞の代表的なものには以下のようなものがある。それぞれの動詞について、本動詞での意味と大凡対応する日本語訳を挙げる。

補助動詞	<i>u]</i>	<i>ufu</i>	<i>nyaan</i>	<i>mii]</i>	<i>fi]</i>
本動詞の意味	いる	置く	ない	見る	くれる
対応する日本語	ている	ておく／てある	てしまう	てみる	てくれる／てあげる

これらが補助動詞として使われるとき、本動詞の連言を表す形に続いて用いられる。

- (25) a. *yarabi=nu=du*    *c]kui=yu*    **tataki**    **u]**.  
 子供=*Nom=Foc*    机=*Acc*    叩く    *Stat*  
 子供が机を叩いている。
- b. *miinaa=n=na*    *pano=o=du*    **ibi**    **ufu**.  
 庭=*Dat=Top*    花=*Acc=Foc*    植える    *Perf*  
 庭に花が植えてある。

また、形容詞も、動詞とともに用いられ補助的な意味を表すことがある。代表的なものには、以下のようなものがある。

補助形容詞	<i>bus]-kan</i>	<i>guri-gan</i>	<i>yas]-kan</i>	<i>goon</i> <sup>*32</sup>
意味	ほしい	難しい	易い	難しい

これらが補助形容詞として使われるときは、子音語幹動詞は]を介して動詞に付き、母音語幹動詞は語幹の形でそのまま動詞に付く。<sup>\*33</sup>

\*32 なお、*goon*に形容詞接辞が付いた例は、未だ見いだせていない。語幹のままで用いられていると思われる。

\*33 *padz]mi]* (始める)、*tudz]mi]* (終わる)などは動詞であるが、補助形容詞と同じ接続をする。*padz]mi]*、*tudz]mi]*などの補助動詞が、*u]*、*ufu*などの補助動詞と、意味的・機能的にどのように違うのかは未だ分かっていないが、ただ、日本語でも前者はいわゆる連用形に接続し、後者はテ形に接続するという違いがあり、対応するものと思われる。どちらの現象もある程度歴史的な説明が必要であろうと思われる。

- (26) a. **tac**<sub>1</sub>    **bus**<sub>1</sub>-**kan**=suga=du    tat-ari-n.  
 立つ    *Des-AA=Conces=Foc*    立つ-*Pot-Neg*  
 立ちたいけれど立てない。
- b. unu    sinbun=nu    dz<sub>1</sub>=ya    **mii**    **yas**<sub>1</sub>-**kan**.  
 この    新聞=*Gen*    字=*Top*    見る    易い-*AA*  
 この新聞の字は読みやすい。

### 3.3.4 名詞述語・形容詞述語に見られる活用

動詞述語において動詞接辞の膠着によって表される意味は、名詞述語、形容詞述語にも一部見られる。それを、ここでは名詞・形容詞述語の活用と呼ぶ。

接辞1によって表される意味は、名詞述語の活用においては、コピュラ動詞 *a*<sub>1</sub> (ある) を介して動詞接辞を下接することで表される。

- (27) 派生 : sinsii ar-a-ma (先生でいらっしゃる)  
 副動詞 : sinsii ar-a-daari (先生でなく)、sinsii ar-a-daaraa (先生でなければ)  
 定動詞 : sinsii ar-a-n (先生でない)、sinsii ar-a-ddan (先生でなかった)、  
 sinsii ar-a-baa (先生だったらなあ)

他方、名詞述語の連言や理由は、助詞を付けることで表される。前者には *basi*<sup>\*34</sup>、後者には *riba* という助詞が付けられる。*riba* を助詞とすることについては3.4.3を参照。

- (28) a. unu    putu=nu=du    sinsii=**basi**    kanu    putu=nu=du    siitu.  
 この    人=*Nom=Foc*    先生=*Conj*    あの    人=*Nom=Foc*    生徒  
 この人が先生で、あの人が学生だ。
- b. unu    puto=o    sinsii=**riba**=du    maanu    mac<sub>1</sub>gaa-n.  
 この    人=*Top*    先生=*Csl=Foc*    あまり    間違う-*Neg*.  
 この人は先生なので、あまり間違わない。

形容詞の活用においては、接辞1によって表される否定的な意味が、動詞 *nyaa* を修飾することで表される。*nyaa* は、否定の意味を持つ接辞とのみ使われる動詞である。形容詞による動詞 *nyaa* への修飾は、接辞 *fu* を使って行われる。<sup>\*35</sup>

\*34 由来は、対格に付く主題形式 *ba* に「する」を意味する動詞の連言の形 *asi* が付いたものと思われる。

\*35 実際は、形容詞が否定を伴うときには、主題の *a* が入り、たとえば *s<sub>1</sub>daa-f=fa nyaa-n* のように表現される。ここでは主題を抜いた形で示す。

- (29) 副動詞：sɿdaa-fu nyaa-daaraa (涼しくなければ)、sɿdaa-fu nyaa-daari (涼しくなくて)  
 定動詞：sɿdaa-fu nyaa-n (涼しくない)、sɿdaa-fu nyaa-ddan (涼しくなかった)

形容詞の連言や理由は、形容詞に動詞化接辞 *gar* を付け、それに動詞接辞を付けることで表される。連言を表す接辞 *phi* には、(30-a) のように *i* が挿入され、理由を表す接辞 *iba* は (30-b) のようにそのまま *gar* に付く。

- (30) a. uma=nu      dzasɿkɿ=sa      sɿdaasɿ-kari=du      pɿsu-gan.  
 ここ=Gen    部屋=Top    涼しい-AA=Foc    広い-AA  
 この部屋は涼しくて、広い。
- b. sɿdaasɿ-kar-iba      uma=n      ura-di.  
 涼しい-AA-Csl      ここ=Dat    いる-Vol  
 涼しいのでここにしよう。

### 3.4 文助詞

本稿では、意味的に文を項として取る助詞を文助詞と呼ぶ。文助詞は、テンス、モダリティ、文と文の接続関係、談話構成などを表す。文助詞は、動詞に付く場合、基本接辞 *ɿ* を介して接続し<sup>\*36</sup>、定動詞接辞の後にも現れる。また、複数の文助詞が同時に現れることもある。

#### 3.4.1 テンス

テンスを表す助詞には、過去時制を表す *daɿ* と未来を表す *gumata* がある。

- (31) a. baka    sɿkyaa=ya    im=mu=du    asi    uɿ=daɿ.  
 若い    頃=Top    海=Acc=Foc    する    Stat=Past  
 若い頃は、漁師をしていた。
- b. aca    ensoku=riba    syaauki    asɿ=kumata.  
 明日    遠足=Csl    早起き    する=Fut  
 明日、遠足なので早起きをする。

なお過去は、連言を表す形によっても表すことができる。

\*36 形容詞に付く場合には、テンスと条件は接辞 *ga* に付き、モダリティ、接続標識、談話標識は、*gan* に付く。形容詞になぜこのような区別があるのかは分かっていない。

- (32) tamaani ifu baa=n=na niikan=gami asubi.  
 たまに 行く 時=Dat=Top 夜遅く=Lim 遊ぶ.Past  
 たまに行くときは、夜遅くまで遊んだ。

### 3.4.2 モダリティ

モダリティを表す助詞については、およそ標準語の「だろう」に当たる形式として *padz1* があり、「みたい」「ようだ」のように原因を推測するものに *biran*、*doori* などの形式が用いられる。

- (33) (息子たちと別れて30分程立ったので)  
 p1sara=ai=ya c1ki=du u1=**padz1**=ra.  
 平良=All=Top 着く=Foc Stat=Conjec=SF  
 平良には着いているだろう。

- (34) a. (道路が渋滞しているので)  
 dz1ku=nu=du a=ta1=**biran**=na.  
 事故=Nom=Foc ある=Past=Conjec=Q  
 事故があったようだ。

- b. (電話に出ないので)  
 paidi=du ifu=ta1=**doori**.  
 出る=Foc 行く=Past=Conjec  
 出て行ったようだ。

また、伝聞のように証拠性を表す形式として、*din* や *dyaa* が用いられる。

- (35) ksnu=du upura=n yaa=nu mui=**dyaa**.  
 昨日=Foc 大浦=Dat 家=Nom 燃える.Past=Evid  
 昨日、大浦で火事があったそうだ。

### 3.4.3 接続標識

理由関係を表す *riba* (*ryaa*)、逆接関係を表す *suga* がある。

- (36) a. kyuu=ya    tigab<sub>1</sub>=zuba    kaa-ddan=**riba**    aca    kaa-di.  
 今日=Top    手紙=Acc.Top    書く-Neg.Past=Conj    明日    書く-Vol  
 今日は手紙を書かなかったので、明日書こう。
- b. kyuu=ya    tigab<sub>1</sub>=zuba    kaa-dyaaran=**suga**    aca    kaa-di.  
 今日=Top    手紙=Acc.Top    書く-Neg.Vol=Conces    明日    書く-Vol  
 今日は手紙を書かないけど、明日は書こう。

助詞の *riba* は、動詞接辞の *iba* と無関係ではないと思われる。ただし、助詞の *riba* は、定動詞接辞や時制形式のあとに現れ、動詞接辞が持つ異形態 (*iba* と *riba*) を持たない。<sup>\*37</sup> よって、ここでは動詞接辞と別に考えておく。

#### 3.4.4 談話標識

以前から知っている (はずの) 事実について、相手に確認する場合には *ra* や *sagana* が用いられ、自分で思い出す場合には *yaa* が用いられる。

- (37) a. kunusuku    koo=da<sub>1</sub>    kaas<sub>1</sub>=nu=du    a<sub>1</sub>=**sagana**.  
 この間    買う=Past    菓子=Nom=Foc    ある=SF  
 この間買った菓子があるだろう？
- b. uk<sub>1</sub>naa=ya    m<sub>1</sub>n    yuun    ba=a=du    iki    ufu=**yaa**.  
 沖縄=Top    三度    四度    私=Top=Foc    行く    Perf=SF  
 沖縄には三、四回、僕は行ったよな。

他方、それまでは知らなかった新しい事実について、相手に教える場合には *doo* が用いられ、お互に確認し合う場合には *naa* が用いられる。

- (38) a. (洗濯物を取り込むように言うために)  
 ami=nu=du    ffi    ffu=**doo**.  
 雨=Nom=Foc    降る    来る=SF  
 雨が降ってきたよ。

\*37 ただし、*siba* という形が調査において見られた。話者によると *siba* と *riba* に意味的な差はないようである。

b. (二人で外を眺めながら)

ami=nu=du      ffi      ffu=naa.  
 雨=Nom=Foc    降る    来る=SF  
 雨が降ってきたね。

疑問を表す助詞としては、肯否疑問、疑問詞疑問ともに *ga* が用いられる。この文末の *ga* はなくても構わない。また、*ga* は、宮古島南部諸方言と異なり、係助詞として用いることはできない。*ga* は文末専用であり、係助詞としては *du* が用いられる。

- (39) a. vva=a=du      soodz1    as1=ta1=ga?  
 母=Nom=Foc    掃除      する=Past=Q  
 おかあさんが掃除をしてくれたの？
- b. ndza=ngi=du    asbi    ifu=ta1=ga?  
 どこ=Loc=Foc    遊ぶ    行く=Past=Q  
 どこに遊びに行ってた？

禁止を表す形式には *na* がある。

- (40) ayas1-kar-iba      uma=n=na      tac1=na.  
 危ない-AA-Csl    そこ=Dat=Top    立つ=Phb  
 危ないので、そこに立つな。

#### 4 談話—モウスという名前—

最後に狩俣方言による短い談話を載せる。談話は、池間平治氏による独り語りを仲宗根正治氏の協力により書き起こしたものである。

a1zi    k1kas-i.  
 言う    聞かす-*Imp*  
 言ってあげようね。

asiga      nnama=ami    a1=da=ngari      nnama=ami    a1=da=ngari  
 そしたら    今=*Lim*      言う=Past=ように    今=*Lim*      言う=Past=ように  
 つまり、今言ったように、今言ったように、

kanu ikyaan=na ikyaan=na faa=nu mmari-digaa  
 あの 昔=*Top* 昔=*Top* 子供=*Nom* 生まれる-*Cond*  
 昔は子供が生まれると、

tuka=mai amari=mai ama|=mai nara-daaraa=du  
 十日=も 余り=も 余り=も なる-*Neg.Cond=Foc*  
 十日過ぎにもならなかったら

unuu gandzuu-gan=ci=nu kutu=u ssari-ddan=din=riba=du  
 その 丈夫-*AA=Quot=Gen* 事=*Acc* 知る-*Neg.Past=Evid=Csl=Foc*  
 丈夫な子かどうか分からなかったそうだから

yakuba=ai tuduke idas-a=ci umuu=ribamai uturus|=kar-iba  
 役場=*All* 届け 出す-*Vol=Quot* 思う=*Conces* 心配だ-*AA-Csl*  
 役場に届けを出そうと思っても、心配だったので

idas-ari-ddan=dyya. ariba=du mmya unu tuduke idas|=munu mmya  
 出す-*Pot.Neg.Past=Evid* そして=*Foc DM* その 届け 出す もの *Int*  
 出せなかったって。そして、その届けを出すものは

putuc|=mai futac|=mai ama.. nagoonai kaa|=putu mmya  
 一月=も 二月=も 長く かかる 人 *Int*  
 一ヶ月も二ヶ月も長くかかる人は

ikkanen pututi-gamaasu=mai nuuba-ryaa  
 一年間 一年-間=も 延びる-*Csl*  
 一年間も延びると、

idas|=idas|=su asi u=ta|=din=riba=du  
 出す-出す=*Acc* する *Stat=Past=Evid=Csl=Foc*  
 (届けを) 出していたそうなので、

unuu asuga=du mmya unuu ati faa=nu panari  
 その *Conces=Foc DM* その あまりに 子供=*Nom* 離れ  
 でも、あまりに子供が離れ

sɲni=dyaan ur-iba mmya nooci naa=yu cɨkɨr-iba=du  
 死ぬ=ばかり いる-Csl DM どのように 名前=Acc 付ける-Csl=Foc  
 死んでばかりいるので、どんな名前を付けると

gandzuu faa=n naɨ=gumata=gana=ci asi sina-n moosɨ=ci=nu  
 健康 子供=Dat なる=Fut=Q=Quot する 死ぬ-Neg モース=Quot=Gen  
 丈夫な子供になるかなって考えて、死なないモースという

yanabata putu=nu uri u=taɨ=din=riba mmya  
 悪い 人=Nom いる いる=Past=Evid=Csl DM  
 悪い人がいたらしいので、

uyan=gara=mai miffa-sa asir-ari uɨ putu a=taɨ=din=riba  
 神様=Abl=も 憎い-Nmlz する-Pass Stat 人 ある=Past=Evid=Csl  
 神様からも憎まれる人がいたそうなので

uri=ga naa=yu turi moosɨ=ci=nu naa=yuba cɨkɨ-daraa=du  
 それ=Gen 名前=Acc 取る モース=Quot=Gen 名前=Acc.Top 付ける-Cond=Foc  
 その人の名前を取って、モースと言う名前を付けたら

un=gara mmya gandzuu faa=ya mmari=daɨ=dyaa. owari mmya.  
 それ=Abl DM 健康 子供=Top 生まれる=Past=Evid 終わり DM  
 それから、丈夫な子供が生まれたって。終わり。

### グロス略号一覧

<i>1Sg</i>	1st Person Singular 一人称単数	<i>Gen</i>	Genitive 属格
<i>2Sg</i>	2nd Person Singular 二人称単数	<i>Imp</i>	Imperative 命令
<i>AA</i>	Adjectival Affix 形容詞接辞	<i>Lim</i>	Limitative 限界格
<i>Abl</i>	Ablative 奪格	<i>Loc</i>	Locative 場所格
<i>Acc</i>	Accusative 対格	<i>Neg</i>	Negation 否定
<i>All</i>	Allative 向格	<i>Nmlz</i>	Nominalizer 名詞化接辞
<i>Ben</i>	Benefactive 受益	<i>Nom</i>	Nominative 主格
<i>Csl</i>	Causal 理由	<i>Pass</i>	Passive 受身
<i>CL</i>	Classifier 分類詞	<i>Past</i>	Past 過去
<i>Conces</i>	Concessive 譲歩	<i>Perf</i>	Perfect 完了
<i>Cond</i>	Conditional 条件	<i>Phb</i>	Prohibition 禁止

<i>Conj</i>	Conjunction 接続	<i>Pot</i>	Potential 可能
<i>Conjec</i>	Conjecture 推測	<i>Prep</i>	Preparative 準備態
<i>Cop</i>	Copula コピュラ	<i>Purp</i>	Purposive 目的格
<i>Dat</i>	Dative 与格	<i>Q</i>	Question 疑問
<i>Des</i>	Desiderative 願望	<i>Quot</i>	Quotative 引用
<i>DM</i>	Discourse Marker 談話標識	<i>SF</i>	Sentence Final Particle 終助詞
<i>Evid</i>	Evidential 証拠性	<i>Stat</i>	Stative 状態
<i>Foc</i>	Focus 焦点	<i>Top</i>	Topic 主題
<i>Fut</i>	Future 未来	<i>Vol</i>	Volition 意志

### 参考文献

- Comrie, Bernard (1981) *Language Universals and Linguistic Typology*: Basil Blackwell.
- Ladefoged, Peter and Ian Maddieson (1996) *The Sounds of the World's Languages (Phonological Theory)*: Wiley-Blackwell.
- Pellard, Thomas (2010) “Ōgami: éléments de description d'un parler du sud des Ryūkyū,” Ph.D. dissertation, École des hautes études en sciences sociales.
- Shimoji, Michinori (2008) “A Grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan Language,” Ph.D. dissertation, The Australian National University.
- (2011) “Irabu Ryukyuan,” in Yamakoshi, Yasuhiro ed. *Grammatical sketches from the field*, Tokyo: ILCAA.
- 青井隼人 (2010) 「南琉球方言における「舌先の母音」の調音的特徴: 宮古多良間方言を対象としたパラトグラフィー調査の初期報告」, 『音声研究』, 第14巻, 第2号, 16-24頁.
- 内間直仁 (1984) 『琉球方言文法の研究』, 笠間書院.
- (1994) 『琉球方言助詞と表現の研究』, 武蔵野書院.
- 大野眞男・久野眞・久野マリ子・杉村孝夫 (1998) 『宮古大神島方言の音声—単語と文法— (付: 狩俣方言)』, 平成8・9年度科学研究費成果刊行書.
- 大野眞男・久野眞・杉村孝夫・久野マリ子 (2000) 「南琉球方言の中舌母音の音声実質 (特集琉球方言の音声)」, 『音声研究』, 第4巻, 第1号, 28-35頁.
- 加土工真市 (1989) 「宮古方言音韻論の問題点」, 『沖縄文化—沖縄文化協会創設四〇周年記念誌』, 『沖縄文化』編集所, 421-439頁.
- かりまたしげひさ (1986) 「宮古方言の「中舌母音」をめぐって」, 『沖縄文化』, 第66巻, 73-83頁.
- 狩俣繁久 (1999) 「宮古諸方言の動詞「終止形」の成立について」, 『日本東洋文化論集』5, 琉球大学, 27-51頁.

- かりまたしげひさ (2005)「沖縄県宮古島平良方言のフォネーム」, 『日本東洋文化論集』 11, 琉球大学法文学部, 67-113頁.
- (2007)「琉球語音韻変化の研究」, 京都大学特別講義資料.
- 沢木幹栄 (2000)「宮古方言の問題点」, 『音声研究』, 第4巻, 第1号, 36-41頁.
- 鈴木重幸 (1996)『形態論・序説』, むぎ書房.
- 名嘉真三成 (1992)『琉球方言の古層』, 第一書房.
- 野原三義 (1996a)「平良市狩俣方言の助詞(1)」, 『地域研究シリーズNo. 23 宮古、平良市調査報告書(1)』, 沖縄国際大学南島文化研究所, 13-30頁.
- (1996b)「平良市狩俣方言の助詞(2)」, 『地域研究シリーズNo. 23 宮古、平良市調査報告書(2)』, 沖縄国際大学南島文化研究所, 57-83頁.
- 服部四郎 (1950)「附属語と附属形式」, 『言語研究』, 第15巻, 1-26頁.
- 林由華 (2009)「琉球語宮古池間方言の談話資料」, 『地球研言語記述論集』 1, 総合地球環境学研究所, 153-199頁.
- 平山輝男・大島一郎・中本正智 (1967)『琉球先島方言の総合的研究』, 明治書院.
- ペラールトマ・林由華 (2012)「宮古諸方言の音韻一体系と比較一」, 『「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」宮古方言調査報告書』, 国立国語研究所, 13-51頁.
- 本永守靖 (1994)『琉球語圏生活語の研究』, 春秋社. (元『琉球大学教育学部紀要』 17, 1973年).
- 屋名池誠 (2005)「活用の捉え方」, 『新版 日本語教育事典』, 大修館書店, 71-77頁.

## 謝辞

本稿は、科学研究費（課題番号21820023、23720229）の助成を受けて行った調査を元に行っている。この調査に対して、快くまた辛抱強く、お付き合い頂いた方言話者、池間平治氏・仲宗根正治氏に、末筆ながら感謝申し上げます。